

笑い一念 その二

有富洋二

その後、江戸初期までは言葉遊びの域を出ない俳諧であったが、次第に人々の欲求を満たさなくなってきた、後の時代になると「俳諧とは滑稽である」と徐々に内容に厚みを帯びてくる。曰く「俳諧とは使う言葉ではなく滑稽のこころである。是を非とし非を是とし、実を虚に虚を実にする。身もこころも俳諧でなければならない」とは談林俳人惟中の主張。笑いにより従来の価値観、美意識と対峙し、あえて言えば笑いによる破壊によるのみ浮き彫りにされる真実というものがあるという考えである。蕉門の支考は、俳諧を人間関係や人生の問題として大きく展開し、談笑によって硬直した現状を打破し、新たな状況に転換していく力が俳諧にはあると述べた。常識や決まり事では突破できない行き詰まりを、滑稽人は気分や人情の機微に通じた笑いによって切り抜け、人生を豊かで幸せなものにするということなのであろう。理屈では片づけられない人間存在の真実という領域である。人生にはひょっとしたら、人間存在を笑う以外にどうしようもないことだってあるのかも知れない。

この様に、さまざまな力を持つ「笑い」を、いわゆる情趣と同等に重要視していた他ならぬ芭蕉は、「去来抄」の中に「発句は俳意たしかに作すべし」と指導したとある。

顔に似ぬ発句も出よはつ桜

初心忘れぬ芭蕉、五十一歳没年（1694年）の作。掲句をはじめ「近世滑稽俳句大全」加藤郁乎著（読売新聞社）には江戸時代の俳人達の手による八百に及ぶ出典の中から五千二百余りの滑稽句が所収されている。

正月を馬鹿で暮らして二月かな（秋風）

ちる時に又ほめらるゝ桜かな（湖堂）

老となるはじめや月を見あげしは（正頼）

ことほど左様に滑稽千万、圧巻の滑稽俳句集である。

明治になり子規に再発見される蕪村は芭蕉没後二十二年経て（1716年）生まれるが、芭蕉を大いに崇拝していた。

起て居てもう寝たと云夜寒哉（蕪村）

春雨やものがたりゆく蓑と傘（同）

青梅に眉あつめたる美人哉（同）

「芭蕉去てそのゝちいまだ年くれず」とまで詠んだ蕪村である。復本一郎著「江戸俳句百の笑い」（コールサック社）には、蕪村をはじめ多くの俳人の句の「笑い」を百のパターンに分類してその解説をしている。

明治時代になってあの子規でさえ、たくさんの滑稽句がある。持ち前の

ラジカル性溢れる子規は、従来の月並み俳諧を否定し、写生という方法論にたどり着き、俳諧を文学にまで高めようとする中で、技術に嵌った滑稽は捨てようとしたであろうが、最後にはあの「へちま三句」に代表されるように、質の高い「滑稽」を完成させたともいえる。

(続く)